石橋中学校区

【目指す子ども像】

地域とつながり社会に貢献できる子ども

【実践研究課題】

教育活動全体を通じて、居がいのある学級・学校づくりを推進し、児童生徒の自己肯定感を高め、豊かな情操と道徳性を備えた社会に進んでよい行いができる子どもの育成

各部会の取組

＜学習指導部会＞

【児童生徒の実態】

・小学校…明るく素直な児童が多い。学習に対する主体性や論理的に考えること、クラス全体で発表すること等に課題がある。
・中学校…友達の良さを認め、協力して学習に取り組める。自分の考えを論理的に思考し、表現することに課題を抱えている。

【部会のねらい】

主体的に考え、級友と意見を交流し、表現できる。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭･地域との 連携・協力

取組	・「読む」「聞く」「話す」「書く」を意識させ、ペアやグループ活動を活発に行い、児童生徒の思考をつなげる授業を実践する。これを通して、考えを広げたり、深めたりして、論理的に思考し、表現できる力を付けさせる。 ・５つの視点をもった「振り返り」を書くことで、思考力・判断力・表現力を付けさせる。 ・タブレットを活用したプレゼンテーション等の授業改善を実践し、クラス全体で発表する力を付けさせる。 ・あいさつの後に礼、パワーアップノート等を活用した家庭学習の質の向上、家庭学習強調週間の実施、「下野新聞の日」を活用した書く活動、調査結果などを活用した学業指導を行う。
成果	・「聞き方のコツ」「話し方のコツ」が各教室に貼ってあり、ペアやグループでの話し合いで活用できた。 ・５つの視点を視覚化したことで、その視点を確認しながら「振り返り」を行うことができた。 ・iPadを活用して、様々な教科や総合的な学習の時間で、児童生徒がプレゼンテーションをすることができた。 ・全国学力・学習状況調査やとちぎっ子学習状況調査の結果から弱点を分析したこと、また中学校からの要望を踏まえて、各小学校で、家庭学習強調週間前に、計算や漢字・ローマ字・都道府県等の問題を示し、家庭学習強調週間後に小テストを実施した。児童生徒は、達成すべきことがはっきりしていたので、学習に意欲的に取り組めた。
課題	・パワーアップノート等を活用した家庭学習の質の向上については、児童生徒によって、個人の力の差が大きく、スムーズに取り組むことができない人もいる。家庭学習のやり方や意欲のもたせ方などの工夫をさらに進めていきたい。 ・５つの視点のうち、「視点１　わかった」の場合が多くなってしまう。視点２～５の振り返りができるような授業を行うことが必要である。「振り返り」の時間の確保が課題である。 ・「下野新聞の日」を活用した書く活動については、小学校では、新聞を読ませることが難しい。下野新聞ではなく、読売KoDoMo新聞の方が児童にとって読みやすい。「新聞の日」が運動会の直前だったり、定期テストの週であったりして、実施するための時間の確保が難しいことがあった。

ペアによる「話す」「聞く」活動

グループ活動による話し合い

タブレットを使用したプレゼンテーション

「振り返り」の5つの視点

＜道徳推進部会＞

【児童生徒の実態】

・素直で穏やかな児童生徒である。道徳の授業では、友達の意見を聞いて、自分の考えを広げたり深めたりする様子が見られる。また、ペアや小グループの活動では自分の意見を表現できているが、一斉の場面では発表者が偏る傾向も見られる。
・道徳の時間に自分事として考えているが、生活の中で道徳的実践力として生かせていないことも見られる。

【部会のねらい】

・地域への愛着をもち、社会に貢献できる。
・自己開示をしながら自分を見つめ、考えを表現（話す・書く）することができる。
・道徳の時間を通して深めた道徳的価値への理解をもとに、普段の生活においての道徳的実践力を高めることができる。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭･地域との 連携・協力

取組	・心を育てる月間の各校での実施 「地域とつながり社会に貢献できる子」「心の教育」に関連させる。価値項目は各校の実態に合わせる。 他の部会と時期・内容の調整を図って活動を実施する。 （プロジェクト委員部会、児童生徒指導部会、特別活動部会など） ・道徳の授業の指導の工夫、見取りや評価についての情報交換 ・「ふるさととちぎの心　栃木県道徳教育郷土資料」の活用
成果	・時期を集約させたことで、児童と相手との関わりを考える意識をより高めることができた。 ・部会全体で提案授業を行い、他校の取組について互いに学び合う機会を持つことができた。 ・心を育てる月間の取組が昨年度から引き継がれたため、円滑に活動を行うことができたことや、自己肯定感を育むという意識を教員側が強くもつことができたことで、特別活動における教育的効果の高まりを実感することができた。
課題	・教員の負担感について教育的効果を保ちつつ、持続可能な活動を目指していくことが求められている。それぞれの部会で提案される活動が同時期に重なり、個々の教育的な効果が薄れてしまった。時期の調整が必要である。

すてきすぎるよ展（石橋中）

道徳ノートの掲示（石橋北小）

校内提案授業（石橋小）

全校児童参加による下野市学校音楽祭（細谷小）

公開授業（古山小）

＜児童・生徒指導部会＞

【児童生徒の実態】

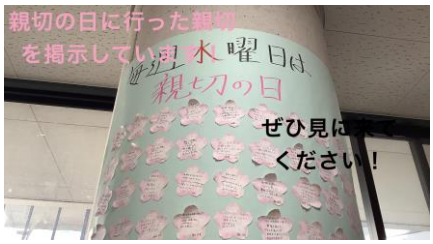
○不登校傾向の児童生徒が増加しており、学年が上がるにつれ、家庭的な難しさや、心の悩みを抱える児童生徒、保護者からのサポートを得ることが難しい家庭が少なくない。
○人間関係が希薄で、ちょっとしたことを気にし、傷付き、トラブルやいじめに発展するだけでなく、関係修復に時間がかかる場合がある。

【部会のねらい】

①学級内や集団内の人間関係に目を向け、自他ともに尊重できる。
②学級の良さに目を向けて、学級や学校に居がい感をもつことができる。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭･地域との 連携・協力

取組	①いじめ防止強調月間（６月、１１月）に合わせて、人間関係作りや互いのよさを認め合う活動を行う。 ②学級内の「つながり」やいじめ防止に目を向けた取組を、発信する。（発達段の階に合わせて） ③教育相談やいじめアンケートを通して、実態把握や児童生徒理解に努める。
成果	①いじめ防止強調月間（６月、１１月）に合わせて、人間関係作りや互いのよさを認め合う活動を行った。 ・子ども未来プロジェクトの活動に合わせて、各クラスでできる取組を考えて行った。 ②学級内の「つながり」やいじめ防止に目を向けた取組を、発信することができた。（発達の段階に合わせて） ・学級内の人間関係をよりよくするための活動や、いじめゼロに向けた取組を外部に発信することで、いじめゼロに対する意識が高まった。 ③教育相談やいじめアンケートを通して、実態把握や児童生徒理解に努めることができた。
課題	・他部会での活動や子ども未来プロジェクトの活動が、児童・生徒指導の目指す、クラスの人間関係構築、「つながり」に関連するものが多く、児童・生徒指導部会でも更にビルドアップするのではなく、その活動を通した変容や、自分たちの学級のよさを発信することで自己肯定感や、クラスへの居がい感を高めることができた。しかし、部会として明確な活動を持たなかったことで各学校での明確な取組にはつながらなかった。



「親切の日」自分の行った親切を掲示（石橋中）

「いじめゼロ」に向けた取組（石橋中）

＜特別支援部会＞

【児童生徒の実態】

・学校生活、集団生活に適応して生活できている児童生徒が多い。
・不登校、不登校気味の児童生徒や特別な支援を要する児童生徒が年々増加している。

【部会のねらい】

学校生活・集団生活に適応して生活できている児童生徒が多いが、集団に適応できず特別な支援を要する児童生徒は、年々増加傾向にある。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭･地域との 連携・協力

取組	・各校の特別支援学級の交流会を実施し、自分のよさに気付かせ、自己有用感を高める。 ・特別な支援が必要な児童生徒に対する効果的な支援や具体策の情報交換を行い、指導方法の共有を図る。 ・特別支援教育コーディネーターとして、担任へのアドバイスや情報共有、ケース会議の企画、外部機関との連携の仕方などについて研修する。
成果	・特別支援学級の交流会として「合同レクリエーション」を実施し、交流を深めることができた。活動を通して、自分のよさに気付き、自己有用感を高めることができた。事前・事後アンケートによると、好意的な回答が目立ち、児童の中学校への理解が深まった。 ・「個別の教育支援計画」の目標を１つにすることによって、支援が必要な児童生徒に対する効果的な支援をすることができた。 ・特別支援教育コーディネーターとして、つまずいているところではなく、うまくいっているところに着目することを担任の先生方にアドバイスすることで、児童生徒について前向きに声を掛ける機会が増え、同僚間でも児童生徒のよいところについて話す機会が増えた。
課題	・１つの行事を中学校区で実施することは、十分な準備が必要で、日程の調整だけでなく、市有バスの予約等や実施計画等を作成する時間を要し、担当者の負担が大きかった。継続するには、検討が必要である。 ・児童生徒の個性を知った上で、特性を生かす場を設け、支援していくことを呼びかけていく必要がある。 ・特別支援教育コーディネーターとして、ケース会議の企画や外部機関との連携の仕方について情報共有を図っていきたい。

小中合同レクリエーション

特別支援学級交流会

＜健康増進・食育部会＞

【児童生徒の実態】

・長引くコロナ禍により、基本的な生活習慣が乱れてしまう児童生徒がいる。
・歯科医院への受診控えや学校での昼食後の歯みがきがなくなったことにより、むし歯がある児童生徒の割合が増加している。
・市の課題である朝食摂取状況について、石橋中学校区の「毎日食べる」割合は87.5%で前年度(令和４年10月調査)より改善傾向にあるが、「朝食とおかず」を食べている割合は62.7%と、前年度より減少している。

【部会のねらい】

望ましい生活習慣を確立することができる。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	・児童生徒自身で、自らの健康生活を振り返り、正しい生活習慣の確立を目指す指導を行う。 ・「いしばし元気っ子週間」を実施し、石橋中学校区全体で「口腔内の健康」について、共通した指導を実施する。 ・朝食指導について、学年に応じて継続して実施する。 ・年１回、健康増進・食育部会だより「いしばし元気っ子」を発行し、家庭への啓発を図る。
成果	・各校共通して「いしばし元気っ子週間」を実施し、「口腔内の健康」について、校内での指導、家庭での取組を行い、家庭との連携を図ることができた。 ・健康増進・食育部会だより「いしばし元気っ子」を発行し、家庭への啓発を行った。 ・朝食指導について、各学校で学年に応じた指導を継続して行った。 ・下野市で実施の朝食アンケートで、石橋中学校区全体として、朝食を毎日食べる児童生徒の割合が87.5%となり、昨年と同率を維持できた。
課題	・朝食指導において、引き続き学年の実態に応じた指導を行い、喫食率の向上、内容の充実を図れるようにする。 ・「いしばし元気っ子週間」を定着させ、児童生徒自身で自らの健康生活を振り返ることができる指導を継続して行う。

「いしばし元気っ子週間」歯磨き指導

「いしばし元気っ子週間」歯ブラシ

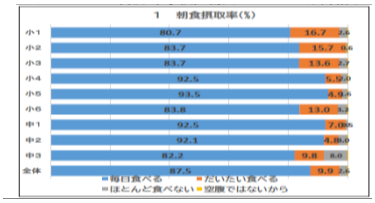
健康増進・食育部会だより
「いしばし元気っ子」

「いしばし元気っ子週間」歯の健康

「いしばし元気っ子週間」歯の健康

健康増進・食育部会だより
「いしばし元気っ子」

「いしばし元気っ子」歯によいおやつ



朝食アンケート

＜特別活動部会＞

【児童生徒の実態】

小学校・・・明るく素直な児童が多い。約束やきまりはしっかり守ることができているが、誰とでも仲良くする事に苦手意識をもっている子どもに対しての支援が課題。
中学校・・・行事や学習に前向きに取り組む生徒が多い。その反面自己肯定感が低く、コミュニケーション不足の生徒の支援が課題。

【部会のねらい】

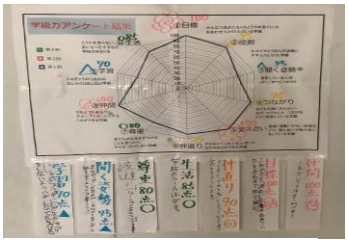
昨年度に引き続き、「学級力アンケート」を活用し、学級の課題を見付け、話し合いを行うことによって自己肯定感やコミュニケーション能力の向上を高めていく。児童・生徒が自分の学級に居がいを感じ、安心して周囲とつながりをもつことができる。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭･地域との 連携・協力

取組	①学級力アンケートを年に２回実施し、自分の学級に居場所をつくれるようにする。 　学級力アンケートの結果をもとにした話し合い活動(学級活動)と取組 ②石橋中学校区の小中学校でキャリアパスポートの共有、情報交換を図る。 ③子ども未来プロジェクトとの連携
成果	①担任・児童生徒ともに学級の課題を把握しやすくなり、またリーダーを中心に解決していこうと自発的な動きが出てきた。また、児童生徒が主体となって話し合いを行い、クラスの問題点についての解決策を自己決定することで多くの成長を見ることができた。 ②キャリアパスポートでは、それぞれの小学校によって実施する内容や時期、回数等を確認し、来年度から時期と回数をそろえられるように情報を共有することができた。 ③児童生徒の中から出てきた意見をもとに、全校を巻き込んで「いじめ」についての話し合いの時間を確保し、考えることができた。また、他の部会との連携が図れた。
課題	①学級力アンケートの実施時期。他部会との連携も考えて実施する必要がある。 ②キャリアパスポートを小中のつながりを意識して作成する。

「学級力アンケート」改善点の話し合い

「いじめゼロ」にむけた話し合い



「学級力アンケート」結果

＜体力増進部会＞

【児童生徒の実態】

○新体力テストの結果において投力の数値が全国平均を下回る傾向にある。
○体育の授業や行事には積極的に取り組む児童生徒が多い。しかし、外遊び等自ら体を動かすことに前向きではない児童生徒も少なからずおり、その中の児童生徒の多くが運動習慣が身に付いていなかったり、運動に苦手意識をもっていたりする。

【部会のねらい】

○児童生徒が「運動が楽しい」「運動したい」という関心意欲をもつことができる。
○運動に親しむ習慣を身に付けさせる。（外で遊びたくなるような工夫・教科体育での運動量の確保・業間運動や遊具の工夫）
○投力や柔軟性の向上を重点課題とし，児童・生徒の体力を向上させる。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭･地域との 連携・協力

取組	・運動習慣の確立や技能・体力の向上を目的とし、教科体育や業間活動を工夫し、児童生徒の体力（特に投力・柔軟性）が向上するような取組を行う。 ・運動に親しむ習慣を身に付けるために、休み時間における児童生徒の外遊びの機会を増やすよう、教員が外での運動を児童生徒に呼びかけたり、教員自ら外遊びに加わって運動する楽しさを共有したりする。 ・今年度の重点課題…「投力・柔軟性の向上」 ①球技運動を通しての投力の向上とボールやボール以外の道具を使っての投げる機会の確保を行う。 ②体育の授業での体操や体つくり運動において柔軟性を高める動きを取り入れる。
成果	・体育や業間活動において、各学校で運動の機会や場の設定を工夫して体力向上に努めた。 ・昨年度に引き続き、教員が外遊びに加わることで外遊びに積極的でない児童も外に行くきっかけになった。 ・授業等で投げる機会を増やしたり柔軟性を意識して取り入れたことにより、全体的に数値の向上が見られた学校や学年があった。 ・中学１年生に関する数値の向上は、部活動を始めたことでの基礎体力が付いたことが要因として考えられる。
課題	・現状以上の運動時間を確保することは難しいため、教科体育や休み時間での活動の仕方を工夫していく必要がある。 ・次年度以降の継続も考え、長期的な目標の設定が必要である。

中学校区としての成果指標

知

全国学力・学習状況調査（国語）の思考・判断・表現の

B書くことに関する問題で**書くことの記述式問題の平均点**

（中3時点）

県平均よりも高い値。無解答率の生徒は県よりも少ない。

徳

全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙調査の回答の平均点
「自分には良いところがあると思う。」

「当てはまる」の回答が県平均、全国平均よりも高い。

体

① 新体力テストのソフトボール投げと柔軟性の数値
② 新体力テストの柔軟性の数値

①の結果

前回比（男女別）			前回比（男女別）			前回比（男女別）			前回比（男女別）			前回比（男女別）	
石橋小	m	%	古山小	m	%	細谷小	m	%	石北小	m	%	石橋中	m
男子	+1.0m	106%	男子	+1.3m	109%	男子	+0.7m	105%	男子	+0.0m	100%	男子	+0.7m
女子	+0.8m	108%	女子	+1.0m	111%	女子	+2.2m	121%	女子	+0.5m	105%	女子	-0.3m
全体	+0.9m	107%	全体	+1.2m	110%	全体	+1.4m	111%	全体	+0.3m	102%	全体	+0.2m

②の結果

小学校	前回比	1年		2年		3年		4年		5年		6年
cm	%	+3.9cm	118%	+0.2cm	101%	+0.8cm	103%	+0.0cm	100%	-0.3cm	99%	+0.7cm
小学校全学年												
+1.0cm	103%											

成果と課題

〇成果

- それぞれの部会で取組が明確になり、ゴールを見据えた活動ができている。
- 9年間を見据えた活動ができている。
- 小中学校で活動がそろえられている。

●課題

- 部会が多いので活動が重なることがある。日程の調整が必要である。
- 学区が広いので児童生徒を集めることが困難であり、児童生徒の合同での活動が難しい。